

湯之口遺跡

平成6年度県営広域営農団地農道整備事業赤城
南麓2期地区に係る埋蔵文化財緊急調査報告書

1996

群馬県勢多郡柏川村教育委員会

湯之口遺跡

平成6年度県営・広域農業団地農道整備事業赤城
南麓2期地区に係る埋蔵文化財緊急調査報告書

1996



例　　言

1. 本書は平成6年度県営広域営農団地農道整備事業赤城南麓2期地区埋蔵文化財発掘調査委託事業「湯之口遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 「湯之口遺跡」は群馬県勢多郡柏川村大字中之沢270-1番地に所在する。遺跡略称はX4である。
3. 発掘調査は平成6年9月30日から平成7年2月15日まで行った。
また、整理作業及び本書の作成は平成7年5月15日から平成8年3月20日まで行った。
4. 発掘調査は平成6年度前橋土地改良事務所からの委託金で実施した。
また、整理事業は、平成7年度前橋土地改良事務所の委託金で行った。
5. 調査組織は次のとおりである。

事務局

教育長　真下辰男
事務局長　松村嘉夫
局長補佐　中島直人
係長　小林進
調査担当
社会文化係長　小島純一　主任　梅澤克典

6. 本書の作成組織は次のとおりである。

事務局

教育長　真下辰男（平成7年9月退任）
木村六郎次（平成7年10月着任）
事務局長　阿久沢正
局長補佐　中島尚人　小林進
文化財担当
社会文化係長　小島純一　主査　梅澤克典

7. 本書の作成は梅澤が編集、執筆、遺構写真を担当し、遺物写真は真下康男（柏川村サンフォト）による。なお、本書の作成には以下の者が参加した。

庶務担当　笠原嘉子　遺物接合復元　鈴木幸子　中嶋あぐり　吉沢てい子
トレース及びレイアウト　飯尾みゆき　石川葉子　鈴木幸子　武井洋子　松村寿江　吉沢てい子

8. 本遺跡のテフラの分析を株式会社古環境研究所に依頼した。また、炭化材同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果については巻末に掲載した。

9. 発掘調査によって出土した遺物については、すべて柏川村出土文化財管理センターで保管管理している。

10. 調査から整理にかけて、下記の方々からご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）
石坂　茂　能登　健　原　雅伸　細野高伯　前原　豊　山下歳信

凡 例

1. 本書の挿図の方位は座標北を示す。
2. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 図1 國土地理院20万分の1「宇都宮」
 図2 國土地理院2.5万分の1「鼻毛石」
3. 本書に掲載した遺構図、遺物図の縮尺は概ね下記のとおりであるが、例外についてはスケールを参照されたい。

全 体 図	1/200
住 居 実 測 図	1/60
カマド実測図	1/30
埋没谷平面図	1/120
土 層 断 面 図	1/60, 1/120
その他の遺構図	1/40
遺 物 図	1/3
4. 遺物番号については平安時代、縄文時代別に土器、石器ごとに通し番号で整理番号を与えた。
5. スクリーントーンの使用は次のとおりである。その他の使用については各挿図ごとの説明を参照されたい。

遺 構 図	燒 土	◆◆◆◆◆
	地 山	▨▨▨▨▨
	石	■■■■■
遺 物 実 測 図	含纖維土器	■■■■■■■■

目 次

卷頭図版	
序にかえて	
例 言	
凡 例	
I 調査に至る経緯	3
II 遺跡の概要	4
1 湯之口遺跡の位置	4
2 調査の概要	4
3 基本土層	5
III 調査の記録	6
1 山崩れ堆積物について	6
2 平安時代の遺構と遺物	6
3 駒文時代の遺構と遺物	10
IV ま と め	13
挿 図	15
遺物観察表	
写真図版	
附 編	

挿図目次

図1 湯之口遺跡の位置	2	図11 1号住居および遺物集中部分遺物	
図2 湯之口遺跡と周辺の遺跡	3	分布状況	18
図3 湯之口遺跡周辺の地形	4	図12 1号住居および遺物集中部分	
図4 湯之口遺跡調査区設定図および土層図	5	出土の遺物	18
図5 調査区セクション図	(折り込み)	図13 平安時代土坑実測図	20
図6 縄文時代埋没谷縛層平面図および 遺物分布状況		図14 平安時代土坑実測図	21
図7 湯之口遺跡全体図	16	図15 縄文時代焼土址実測図	21
図8 1号住居実測図	17	図16 包含層出土の縄文土器	22
図9 1号住居カマド実測図	17	図17 包含層出土の縄文土器	23
図10 1号住居出土遺物	17	図18 包含層出土の石器	23

写真目次

PL. 1	1 調査区全景	5 5号土坑セクション
	2 山崩れ堆積物土層断面	6 6号土坑セクション
	3 黒ボク土層断面	7 7号土坑
	4 山崩れ堆積物下位の倒木痕	8 8号土坑
	5 山崩れ堆積物下位の倒木痕	PL. 4 1 縄文時代焼土址
PL. 2	1 1号住居全景	2 縄文時代焼土址セクション
	2 1号住居遺物出土状態	3 縄文埋没谷縛層（東から）
	3 1号住居カマド	4 縄文埋没谷縛層（北から）
	4 1号住居炭化物出土状態	5 縄文埋没谷縛層（南から）
	5 1号住居南側遺物集中部分	6 調査風景
PL. 3	1 1号土坑	PL. 5 1号住居および遺物集中部分出土の土器
	2 2号土坑	PL. 6 包含層出土の縄文土器
	3 3号土坑	PL. 7 包含層出土の縄文土器
	4 4号土坑	包含層出土の石器

湯之口遺跡

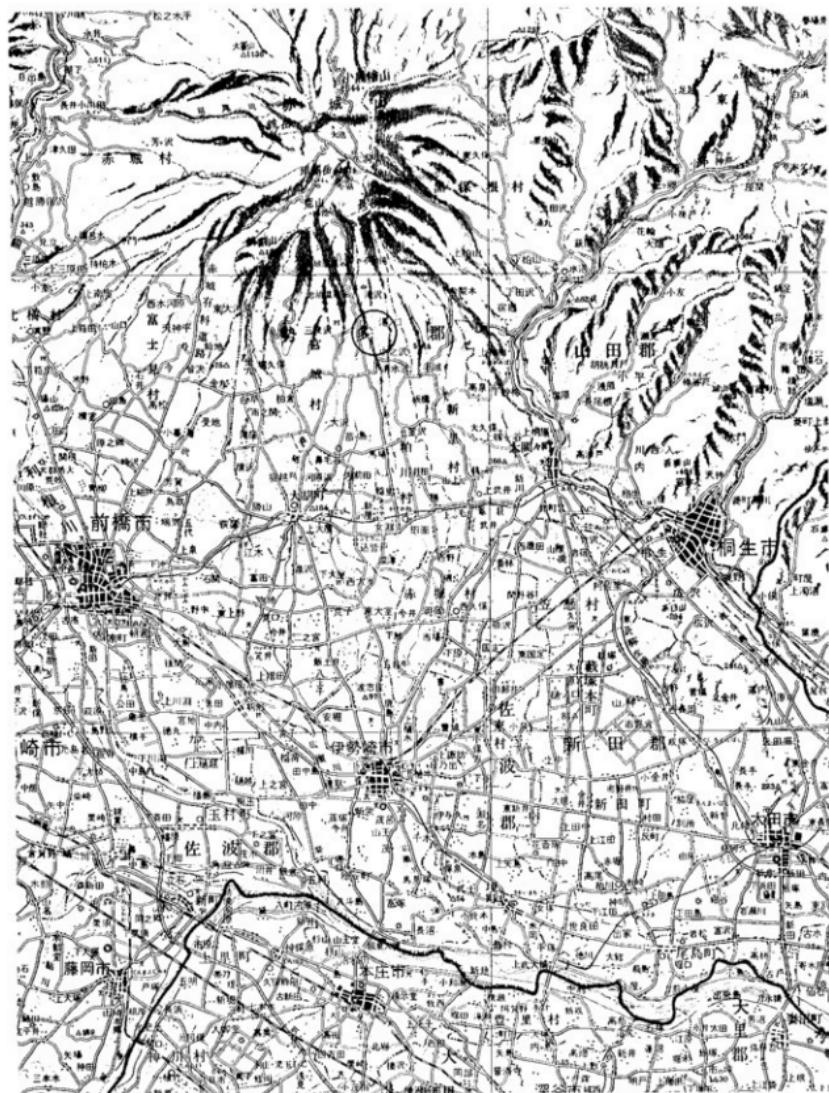


図1 湯之口遺跡の位置

湯之口遺跡の発掘調査は、県営広域營農団地農道整備事業赤城南麓2期地区事業に係る埋蔵文化財の緊急発掘調査として、御殿遺跡⁽¹⁾（平成5年度実施）に続いて実施した。

御殿遺跡の発掘調査が終了した平成6年3月、前橋土地改良事務所から柏川村教育委員会へ、平成6年度以降の事業予定地内の埋蔵文化財の所在について、照会があった。柏川村内の広域農道建設予定地内には、御殿遺跡の他にも埋蔵文化財が存在する可能性があつたため、試掘調査による確認が必要であった。

平成6年4月22日、村教育委員会と前橋土地改良事務所とで、試掘調査の実施について協議を行い、その結果、4月25日から5月25日まで村教育委員会が試掘調査を実施し、新たに縄文時代の遺物包含層と平安時代の集落跡を確認した。村教育委員会は、前橋土地改

良事務所に試掘調査結果を報告すると併に、文化庁宛に遺跡発見の通知を提出した。

平成6年6月27日、同埋蔵文化財の保存措置について協議を行い、その結果、平成6年10月を目処に発掘調査を開始し、年度内に終了することが決定した。また、費用の負担や調査後の整理作業については、御殿遺跡の場合と同様にする事等が取り決められた。

委託契約は平成6年9月12日付けで、前橋土地改良事務所と柏川村との間で取り交わされ、これを受けて、発掘調査は平成6年9月30日から開始し、平成7年2月15日まで実施した。

(1) 柏川村教育委員会 「御殿遺跡—平成5年度県営広域營農団地農道整備事業赤城南麓2期地区に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—I」 1995

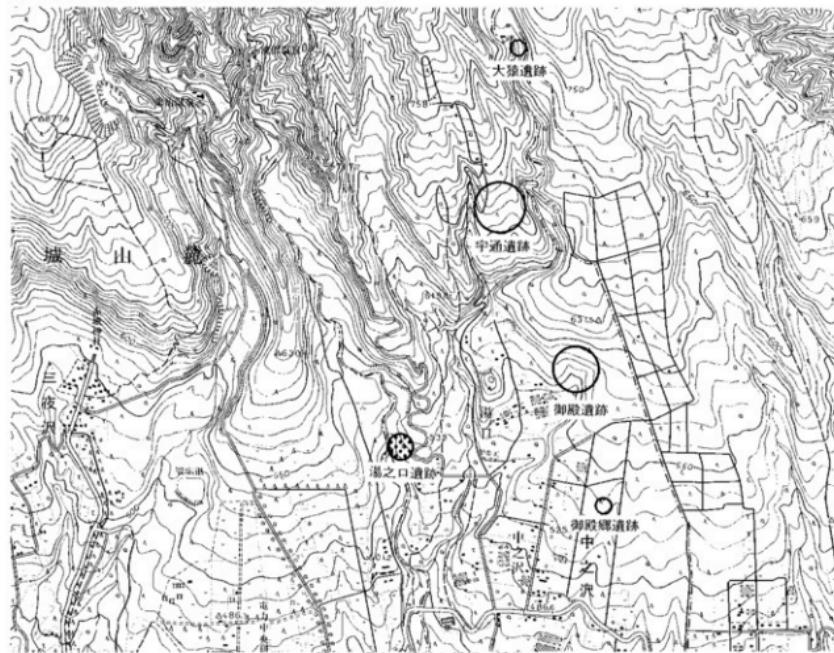


図2 湯之口遺跡と周辺の遺跡

1 湯之口遺跡の位置

湯之口遺跡は、柏川村大字中之沢字湯之口に所在する。遺跡の位置は、柏川本谷に沿って南々東へ走向する尾根の側、標高520メートル程の処にあり、地形的には山地から丘陵地への変換点にある。遺跡は尾根の中腹の、柏川に面崖する狭小な平坦面上にあり、柏川との比高差は約10メートルである。

湯之口遺跡の東北東と、東方約1キロメートルには、現在のシクラメン団地周辺の湿地帯を囲むように、御殿遺跡および御殿郷遺跡がある。⁽¹⁾いずれも標高500メートル以上の山地と丘陵地との地形の変換点の立地である。

御殿遺跡および湯之口遺跡は住居跡を伴う集落遺跡である。御殿郷遺跡は平安時代の大型炭窯1基だけの調査であったが、山林内の一画の調査であったため、

周辺に住居跡等の生産集団の集落遺跡が存在する可能性がある。

柏川村内には、他に高標高地の遺跡として、宇通遺跡（標高650メートル）と大駿遺跡（標高750メートル）⁽²⁾がある。しかし上述の3遺跡と異なり、急峻な山地形に立地している。大駿遺跡については、未調査のため性格不明であるが、宇通遺跡については山岳寺院跡と考えられており、もともと占地条件が異なっていたと考えられる。

2 調査の概要

湯之口遺跡の調査区は、現道から約150メートル奥の山林内にある。そのため調査は、大型重機を使用して伐開した樹木の片付け、および収入出路を確保する作業から開始した。続いて表土掘削作業に取り掛かった



図3 湯之口遺跡周辺の地形

が、厚く堆積した山崩れ堆積物層を傾斜面から搬出するために、大型クローラーダンプを導入した。これらの作業は、平成6年10月30日から始め、11月11日までかかった。

調査区は、公共座標系 X = 53200.00, Y = -56940.00 を原点に、 4×4 メートルグリッドを設定し、各ラインは、西から東へ数字、北から南へアルファベットで呼称した。また、グリッド名は北西隅の基準点に従った。調査に際しては、ベルトコンベアー等を導入し、傾斜面での作業の省力化を図った。

調査は平安時代の遺構の精査および、山崩れ堆積物の調査から始めた。縄文時代の調査は平安時代の調査が終了した部分から、順次トレーニによる確認作業を行い、遺構、遺物が確認できたトレーニを拡張して行くという手順を行った。その結果、調査区の約西半分で縄文時代の埋没谷および包含層が確認できた。

現場における作業は、平成7年1月20日までに終了し、その後2月15日まで、遺物の水洗注記作業、および図面の整理等を行った。総発掘調査面積は355m²、発

掘調査参加人員は延べ620人であった。

3 基本土層

図4に試掘調査時に確認した湯之口遺跡周辺の土層堆積状況を示した。地形のエレベーションは土層柱状図を作成した箇所を通り、かつ地形の様相が分かりやすいように表してある。

I 黒褐色 表土層。

II 暗黄褐色 山崩れによるローム主体の堆積土層。

中層に黒ボク土主体の二次堆積土層をはさみ、3層に分層できる。

III～VI 黒色～黒褐色 黒ボク土層。含まれる粒子によりに分層した。III層 黒色。F.P. 粒子をわずかに含む。IV層 黒色。F.A. 含有層。また、F.A. 純層も部分的に認められる。V層 黒色。As-C 粒を多量に含む。VI層 黒褐色。As-C 粒をわずかに含み下位のVII層と漸移的な層。

VII 暗黄褐色 VI層とVII層ロームとの漸移変化層。

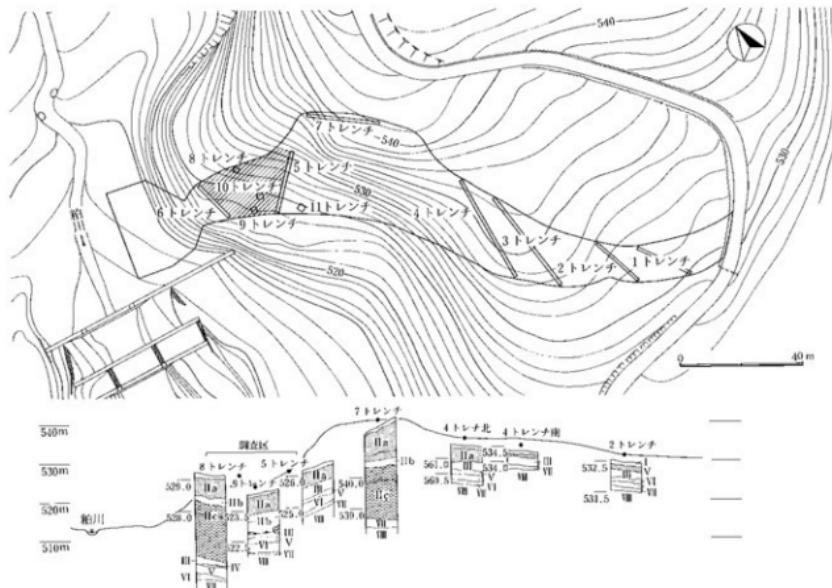


図4 湯之口遺跡調査区設定図および土層図

VIII 暗黄褐色 ローム層。斜面下位では二次堆積となる。

I層は腐植土層で森林下のため堆積は薄い。I層下位からIII層F.P.層上位まで山崩れによるローム主体の堆積層が認められる。山崩れ堆積物は上層と下層に認められ、上層はローム細粒主体の柔らかい堆積で、下層はハードロームブロック主体あるいは、ハードロームがそのまま地滑りして来たような堆積状況である。間層に黒ボク土の二次堆積層が認められるため、山崩れは時期を隔て2度にわたり起ったものと考えられる。なお、調査区東方の尾根上では上層のみが認められ、下層の山崩れ堆積物は斜面下位にむかって崩落したものと考えられる。

III

1 山崩れ堆積物について

湯之口遺跡の調査区は、山崩れ堆積物に厚く覆われており、堆積層の厚さは最大で3メートルにも達する。土層観察によると、下位にはハードロームを主体とするII c層、上位にはローム細粒を主体とするII a層が堆積している。両層の間にII b層の二次堆積黒ボク土層が堆積しているため、過去2回の山崩れが時間をおいて発生したものと推定される。II c層の山崩れ堆積物はAs-Srを滑り面とする地滑り堆積物で、F.P.を含有する黒ボク土層を覆っている。また、II c層上位のII b層中からAs-Bが検出されたことから、II c層の山崩れは、6世紀中葉から12世紀初頭の間に起こり、恐らく818(弘仁9)年に発生した地震に伴うものであったと考えられる。

調査区北縁上部の尾根はこの地滑りによって形成されたと考えられ、尾根上部の試掘7トレンチでは3メートル以上の地滑り堆積物が認められた。

調査区からは地滑りにより押し倒されたと考えられる、樹皮状の倒木痕跡が、II c層下、F.P.含有層上面で検出された(図7、PL. I)。それらは一様に北々東から南々西に向かっている。恐らく調査区北側の尾根上で発生した地滑りは、南々西方向へ、調査区西半部に目がけて押し寄せたものと考えられる。このため遺跡のある台地の鼻先では、柏川の谷に沿って、小規模な土壠状の高まりが形成された。

湯之口遺跡の平安時代遺構は、II c層の上下から検

平安時代の遺構確認面はII層下位およびIII層上面である。III層はF.P.含有層で、湯之口遺跡で肉眼で確認できたテフラーはF.P.以下であった。VII層以下はローム層であり、斜面下位側では二次堆積のロームとなる。繩文時代の遺物包含層はVI層以下VII層二次堆積ローム中にかけてであり、主体となる前期の遺物はVII層を中心まとまって出土している。

- (1) 平成7年度、柏山村教育委員会が調査。平安時代の大型窓基を検出。
- (2) 土断面が表面採取されている。周囲の地表面には、壁穴住居と考えられる窪みが数基観察できる。

調査の記録

出され、山崩れの発生により集落が放棄されることなく廃棄されたことが伺われる。II c層の堆積は調査区南側では薄くなり、1号住居の辺りでは10~30センチメートル程であった。湯之口遺跡集落の中心は調査区南東側の柏川に面する狭小な平坦面にあると予想されるので、II c層の山崩れは集落の北西隅の一部を覆っただけで、集落の存続に影響を与える程ではなかったと考えられる。

II a層はローム細粒を主体とする柔らかい砂質土層で、調査区外にも広く認められるが、特にII c層の地滑りによって生じた小沢状の窪地に厚く堆積している。この部分でII a層は、その下半部が2~数センチメートルの綿状の層理が発達した層として認められる。層理がはっきりしているということは、II a層の山崩れは、地滑りや土石流のような激しい流れではなく、比較的穏やかな流水等によって生じた、密度の軽い流れであったと考えられる。

II a層下位のII b層や1号住居覆土からAs-Bが検出されたため、II a層の堆積は1108(天仁元)年以降と考えられる。しかし、II a層上位で遺構や遺物等が検出されなかつたため、堆積年代の下限をとらえることはできなかった。

2 平安時代の遺構と遺物

1号住居(図8~12、PL. 2, 5)

調査区中央南寄りの、北側尾根から続く斜面下位の

緩斜面部縁辺に位置する。確認面はII c層上面からII b層下位である。

平面観は鶴丸長方形で、長軸方向はN-72°-Eである。規模は長軸が3.95メートル、短軸が3.20メートルで、壁高は東壁が最も深く65センチメートル、西壁および南壁が45センチメートルである。

覆土中層にはAs-Bを純層に近い形で含む灰黒褐色土層が堆積している。その下位にはF.P.、As-C粒を含む灰、およびローム粒を含む層が堆積し、床面直上の第1次埋没土は焼土、炭化物を多量に含む層であった。

床面は旧層からIV層中に営まれ、概ね平坦である。カマド周辺から住居中央にかけては、堅く踏み締められていたが、他の部分はやや脆弱である。

カマドは東壁南半に付設されていた。保存状態は良好であり、袖は柱状の角礫を芯材に用いて灰白色粘土で被覆し構築されていた。袖石の上には細長い剝原石が架けられ、焚き口部を形成していた。袖石から煙道側壁にかけては偏平な円錐が両側に立て並べられ、その上をやはり偏平な円錐で覆って煙道天井部が形成されていた。煙道の方向は、住居の長軸方向よりやや東に偏し、N-82°-Eであった。煙道を含めたカマドの長さは150センチメートル、袖幅は110センチメートルである。

住居南東隅からは、カマド袖に接して、貯蔵穴と考えられるビットが検出された。平面梢円形で長径47センチメートル、短径37センチメートル、深さは28センチメートルであった。この貯蔵穴上面を覆っていた隕は、カマド構築材が崩れてきたものと考えられる。

床面から覆土下層にかけて炭化物および焼土が多量に検出された。炭化物は住居の構築材と考えられるが、遺存状態が悪く、住居のどの部材であるのか判別できなかった。

1号住居からは全部で235点の土器片が出土した。接合復元作業の結果、須恵器壺1点、土師器壺6点、土師器台付壺2点、須恵器壺2点、須恵器高台付壺1点を図示し得た。そのうち、土師器壺5、6、8、土師器台付壺11、須恵器壺12は、1号住居南側の遺物集中部分出土の土器片と接合している。

1は須恵器大型壺で、貯蔵穴内から潰れた状態で一括出土した。2、3、4の土師器壺は覆土下層から床面およびカマド内出土の土器片が接合した資料である。

5、6の土師器壺とともに頸部がやや崩れたコの字状を呈す。8は小型の土師器壺の口部であるが、台付

甕の可能性もある。9は台付甕胴下半から脚部で、カマドおよび貯蔵穴からの出土である。10は台付甕脚部、11は台付甕胴下半部である。12は須恵器壺の底部破片である。

1号住居南遺物集中部分（図11、12、PL. 2, 5）

1号住居の南側、約4メートル×6メートルの範囲から土師器、須恵器等の土器片が集中して出土した。総出土点数290点である。出土層位はII b層の二次堆積黒ボク土中から旧層上位にかけてであり、出土レベルには約25センチメートル程の幅がある。なお、II c層の山崩れ堆積物は、この遺物集中部分にはおよんでいたかった。

本遺構は調査の当初、堅穴住居址と考えられ、サブトレンチを設定して土層観察を行ったが、床面や壁の立ち上がりは確認できなかった。また、平面的な掘り下げ作業によっても、床面や柱穴等の施設は確認できなかった。

本遺構から出土した土器には、1号住居床面やカマド出土の土器と接合するものがあり、1号住居との同時性が考えられる。7の土師器壺は、1号住居出土のものと同様に、頸部が崩れたコの字状を呈する。また、13の須恵器壺、14の土師器高台付壺も、型式的にみて同一時期に属すると考えられる。

本遺構の性格としては、柱穴等は検出されなかつたが平地式の建物、あるいは1号住居の土器捨て場等が想定できるが、いずれにしても1号住居と密接な関係があったものと考えられる。

1号土坑（図13、PL. 3）

1号住居南西側に、ごく近接して位置する。1号住居と同様に、II c層を掘り込んで構築されている。試掘坑により西縁を失ってしまったが、1.5×1.0メートル程の長円形を呈し、深さは、掘り込み面から0.5メートルである。長軸方向はN-87°-E。坑底の形状は椀状で、なだらかに立ち上がるが、II c層を掘り込んでいるため、壙はやや脆弱である。

出土遺物はないが、1号住居とほぼ同じ時期と推定される。

2号土坑（図13、PL. 3）

調査区中央北寄りの、斜面から平坦面への移行部分に位置する。確認面は旧層上面であり、II c層を除去

したところ、小凹地状に確認された。なお、1号土坑以外の平安時代土坑は、すべてⅢ層上面で検出され、Ⅱc層の堆積によって覆土が圧密され、小凹地状に埋んだ状態で確認された。

2号土坑は、 1.2×1.1 メートルの隅丸方形ないし不整形面を呈し、深さは0.5メートルである。長軸方向はN-41°-W。坑底はなだらかで、壁は垂直気味に立ち上がる。覆土下層から坑底にかけて、多量の炭化物小片が出土している。

3号土坑（図13、PL. 3）

1号住居北西に位置する。平面形は 1.1×0.95 メートルの長円形を呈し、長軸方向はN-61°-E。深さは0.45メートルである。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。坑底からは炭化物小片が出土している。

4号土坑（図13、PL. 3）

調査区中央西寄りに位置する。平面形は 1.13×0.93 メートルの長円形を呈し、長軸方向はN-48°-E。深さは0.42メートルである。坑底はほぼ平坦で、立ち上がりはなだらかな椀状である。覆土下層から坑底にかけて炭化物小片が出土している。

5号土坑（図14、PL. 3）

調査区中央西寄り、4号土坑の南西側に位置する。壁の立ち上がりが不明瞭で、半截の際に南西縁辺を失ってしまったが、 0.9×0.7 メートル程度の長円形の平面を呈していた。長軸方向はN-38°-W。深さは0.35メートルである。坑底から壁にかけて椀状になだらかに立ち上がる。覆土中層に炭化物を多量に含む層が認められた。

6号土坑（図14、PL. 3）

調査区中央西寄り、5号土坑の南側に近接して位置する。5号土坑同様立ち上がりが不明瞭であったため、南西縁辺を失ってしまったが、径1メートル程の不整円形を呈していた。深さは0.4メートルで、坑底から立ち上がりにかけて椀状になだらかに立ち上がる。坑底直上には炭化物を含む層が堆積していた。

7号土坑（図14、PL. 3）

調査区のほぼ中央、3号土坑と4号土坑の間に位置する。平面形は 0.65×0.47 メートル程の長梢円形を呈

し、長軸方向はN-60°-E。深さは0.3メートルである。土坑内には $40 \times 30 \times 20$ センチメートル程の自然疊が落ち込んでいた。

8号土坑（図14、PL. 3）

調査区中央南西寄り、1号住居西側に位置する。平面形は 1.55×1.0 メートルの隅丸長方形に近い形を呈し、長軸方向はN-76°-W。深さは0.65メートルである。坑底はほぼ平坦で、立ち上がりはなだらかである。覆土下層に炭化物を含む層が認められた。

3 繩文時代の遺構と遺物

焼土址（図15、PL. 4）

調査区東側斜面部、C-7, 8グリット内で検出された。検出層位はⅦ層の二次堆積ローム中である。確認時点では焼土が面的に広がり、焼土の量からみて自然の営力による所産ではなく、人為によるものと考えられた。

掘り込みのプランが平面では確認できなかったので、サブトレンチを設定して断面による掘り方の確認を行った。しかし明瞭に掘り方をとらえることはできなかつた。焼土混じりの土を取り除いたところ、方形状の落ち込みとなり底面は凸凹していた。この落ち込みの形状が人為的な掘り込みと認められないため、本焼土址は、掘り方を伴わない地床炉であったと考えられる。本焼土址からの出土遺物は無いが、繩文時代包含層であるⅦ層中での検出であるため、繩文時代の早期から前期の所産と考えられる。

繩文時代埋没谷（図6、PL. 4）

調査区西半部から、Ⅳ層の二次堆積ロームによって埋没した谷が検出された。谷というよりも小沢と呼ぶべきもので、當時の水流は無く、雨水等の侵食で形成された小支谷である。埋没谷の方向は北々西から南々東で、柏川の現河道より若干東に向いている。

埋没谷の右岸肩から底面にかけて、谷に流れ込むように疊が集中して認められた。疊は地山の砂礫層に含まれる安山岩で、径数10から数センチメートルの円疊が多い。

埋没谷疊層にからんで土器片等が多数出土している。ほとんどが前期後半の土器で、わずかに早期条痕文系土器と前期前半の土器が認められた。石器は5点のみ

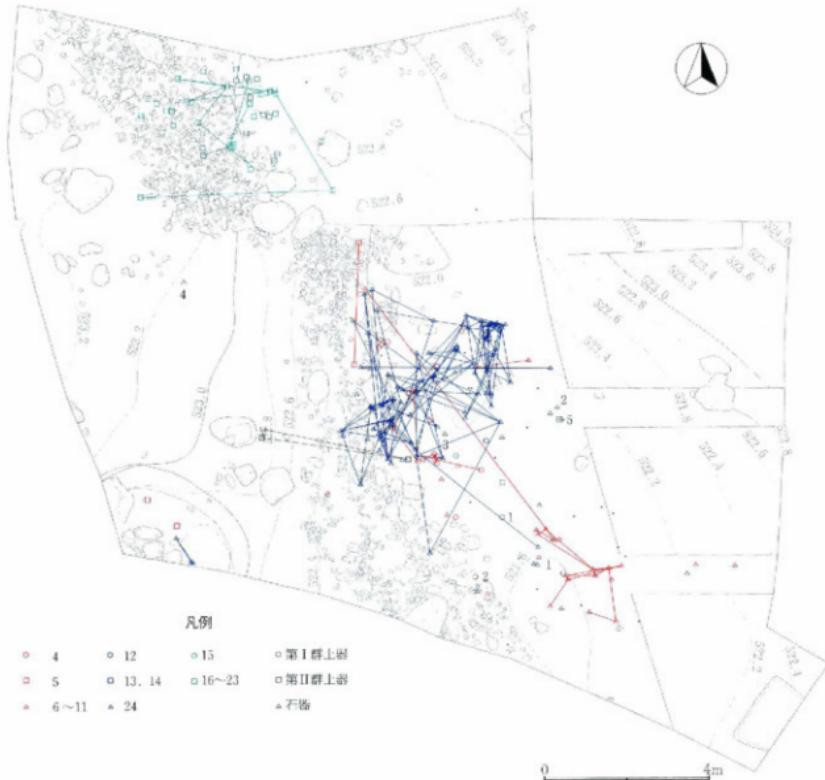


図6 繪文時代埴溝谷縄層平面図および遺物分布状況

の出土で、一般的な包含層からの出土割合に比べると非常に少ない。總遺物点数は238点であった。

これらの上器の個体別の平面分布と接合状況を図7に示した。前期後半の土器群の平面分布について見てみると、大きく北側、中央、南側と3つのブロックにまとまっている。中央のブロックからの土器出土点数が最も多く、南側のブロックが最少である。

北側のブロックはすべて同一個体の破片からなる。また、同じ個体の破片は他のブロックから出土しておらず、閉鎖的である。

南側のブロックも、ほとんどが同一個体の破片からなるが、北側ブロックのものよりも拡散的である。同

じ個体の破片は中央のブロックからも出土している。また、他のブロックで主体的に出土している個体の破片も、わずかに混在している。

中央のブロックからは、接合、復元作業によって器形の伺える資料が3個体出土している(4, 5, 24)。24の破片が主体的であるが、24は径65センチメートル以上の大型深鉢であるため、破片数が多いと考えられる。4の破片の分布は中央のブロック内に収まる。これに対し、5の破片は調査区南西隅からも出土しており、拡散的な分布である。

以上の分布状況から、北側のブロックは、強い独立性が伺え、中央と南側のブロックは、ある程度の独立

性を保ちつつも、繋がりがあったと言えよう。

埋没谷出土の土器の接合、分類作業を行った結果、出土点数の割に以外と個体数が少なかった。また、それぞれの個体は、各ブロックから大きく逸脱することなく、ほぼ原位置を保っており、自然落力による移動量は少なかったと考えられる。この状況から埋没谷出土の土器は、何處からかの流れ込みではなく、人為によって此處に持ち込まれ、各ブロックへ残されたものと考えられよう。また、各個体の残存状態はいずれも4分の1以下であるため、完形やそれに近い状態ではなく、大型破片等が持ち込まれたのではないかと考えられる。石器の出土点数が非常に少ない事と考え合わせると、持ち込まれる遺物が選択された可能性も考えられよう。

早期および前期前半の土器は、中央および南側のブロックにからんで出土している。しかし、出土点数がわずかで、分布傾向を伺うことはできなかった。

包含層出土の縄文土器（図16, 17, PL. 6, 7）

第I群土器（図16、1, 2）

早期の土器を一括した。全部で4点出土したが、いずれも小片である。1、2は胎土にかなり粗い砂粒と、長石、角閃石らの鉱物を含む。無文であるが胎土から、沈線文系ないし条痕文系土器群と考えられる。

第II群土器（図16、3）

前期前半の土器を第II群とした。3点出土したが、接合により1点となった。粗い複節LRを雜に施し、胎土に纖維を含む。黒浜式土器と考えられる。

第III群土器（図16, 17、4～24）

前期後半の土器を一括した。4は胴上半に半截竹管工具で、横位に直線および波状の平行線を巡らし、胴下半にLR横位を施す。5は横位の櫛掃により胴上半と下半を区画し、上半は縦位および斜位の櫛掃で肋骨状のモチーフを描き、また縦位の櫛掃上に半截竹管による円形刺突文を施している。胴下半にはRL斜位を施す。6～11は同一個体である。器面全体に間隔の空いた絹糸条による燃糸文を施し、胴上半には半截竹管工具による横位の平行線で上下を区画した中に、本の葉状モチーフを描く。また、口唇には竹管工具の押し付けによる刻みを施している。24は胴中位に半截竹管の連続刺突文と、刻み目を施した隆線を交互に數段巡らし、その上位には同様の施文方法で、菱形あるいは鉛歯状に区画した中に、巴状、の字のモチーフを描

く。胴下半には端部を結節したRL横位を施す。12～14は縄文のみの破片である。12は胎土に細かな砂粒を含み、地文はLR斜位。13、14は同一個体である。緻密な胎土で焼成は良く堅い。地文にRL斜位を施す。以上の土器は諸磯a式からb式に属すると考えられる。

15は口縁から胴上部の破片である。口縁は外側に短く崩曲し、内側に肥厚して段を有す。外面は丸棒状工具による浅い沈線を横位に数段施し、また胴部と口縁の境も沈線で作り出している。平縁と考えられる口唇上には、縄文原体の押捺による刻目が施され、この土器を特異なものとしている。胎土は細かな砂粒を含み、焼成も緻密で諸磯式土器に類似し、一応この範囲として扱うが、外来系の影響あるいは攬入も考えられる。

16～23は同一個体である。角頭気味の口唇直下から胴上位まで沈線により数段区画し、竹管工具による角押しが、口縁下位の1段目および、2～3段の無文帯を挟み、最下段の区画に施される。この部分は沈線により凸凹の効果を狙ったようであるが、その意図が徹底できなかった部分もある。胴中～下位には両端を結節した羽状縄文が施される。胎土は長石、石英等の粗い砂粒を多く含み、焼成はやや不良で脆い。また地文の施文は、粘土がかなり柔らかいうちに行われたようで、縄文の節がぼやけてしまっている。これらの特徴は諸磯式には無いもので、一応第III群土器に含めたが、15と同様に外来系の土器と考えられ、また時期についても、前中期段階となるかも知れない。

包含層出土の石器（図18, PL. 7）

石器はわずかに6点の出土で、うち5点図示した。

1はドリルである。適当な剥片に、簡単な調整により先端部を作り出している。2～5は剥片である。2には明瞭な使用痕は認められない。3は下端部に、5は両側縁に使用痕がわずかに認められる。4は全周に簡単な調整が施され、右側縁にわずかに使用によるツブレが認められる。

- (1) 附録「柏川村、平成6年度広域農道建設に伴う湯之口遺跡の火山灰分析」報告の、テフラー分析を委託した時点では、湯之口遺跡は3枚の山崩れ堆積物間に覆われていると想定された。しかしその後の土層の検討によって、山崩れは2回であったことが確認され、また分析結果からも同様の見解を得た。上記報告文中の「第1地すべり堆積物」と「第2地すべり堆積物」がIIc層に、「第1地すべり堆積物」がIIa層に相当する。

湯之口遺跡の調査によって、縄文時代の住居層を検出し、また平安時代の集落跡の一部を明らかにした。調査区はごく狭い範囲でしかなかったが、調査例の少ない高標高地の遺跡である故に、いくつかの興味深い点を提示できると思われる。ここではそれらを取り上げてまとめてみたい。

縄文時代

湯之口遺跡では、埋没谷を中心にして多数の埴輪土器片が出土した。その分布および接合状況から、かなり意図的な廃棄が行われたと推定でき、ごく近くに居住地があった可能性が高い。

湯之口遺跡の土器群の主体は前期後半である。前年度調査の御殿遺跡は、早期を主体として中期まで継続する遺跡であり、湯之口遺跡と異なる。もっとも、御殿遺跡内においても、時期別の占地傾向の違いが認められるので、湯之口遺跡の狭い調査区の中では、前期主体の分布域しかとらえ得なかつたと言えようか。

しかし前期の土器についても、湯之口遺跡と御殿遺跡では、前半と後半段階の土器の出土量が逆転しており、むしろ湯之口遺跡の前半段階は、土器片1点だけの出土で、近くに居住地が存在したとは考え難い。

この点から湯之口遺跡は、前期後半の一時期に限った居住と考えられる。それと共に、湯之口遺跡からは外来系の土器が出土しており、何故この時期に異系統の土器を持つ集団が、辺境の山間地に進出して来たのか、という問題が浮かび上がる。

赤城南麓地域における、標高500メートル以上の縄文時代前期の遺跡については、調査例が僅かであるため類型化はできないが、少なくとも御殿遺跡と湯之口遺跡の2つのパターンが抽出できたと思う。特に湯之口遺跡については、前期後半期に、強い指向によって占地されたようで、この時期の高標高地遺跡の一つの典型と考えられよう。しかし遺跡の居住形態等については明確にできず、今後の調査例の増加を待ちたい。

平安時代

湯之口遺跡からは1軒の堅穴住居と遺物集中部分が検出された。その出土遺物から9世紀後半（坂口、¹⁰三浦編年X段階）に位置づけられる。湯之口遺跡は、集落の一部分の調査であったため、継続時期について

は明確でないが、この1軒の住居に限って言えば、宇通遺跡や御殿遺跡と同時期である。しかし、弘仁9(818)年の地震に伴うと考えられる山崩れ堆積物の下位から、7基の土坑が検出されており、すると湯之口遺跡集落は9世紀初頭にまで遡り得る。これまで赤城南麓地域における山間地への集落進出は、9世紀中葉に始まるときてきたが、それに先行して湯之口遺跡集落が形成されたことになる。ただし、山崩れ堆積物の下位からは、住居址等の居住痕跡や、年代決定可能な遺物が認められていないので、本格的な居住が9世紀初頭に開始されたと断定することはできない。

さて、御殿遺跡では、山間地への集落進出の背景に、ヤマの開発を指向する産業の規定があり、それによるサトヤマの拡大と、宗教的なヤマの開発が合致した結果、宇通遺跡や御殿遺跡が成立したとした。しかし湯之口遺跡は、調査の限りでは、地理的環境以外は一般的な平安時代集落であり、宇通遺跡や御殿遺跡のような宗教臭さは感じられない。

ところで御殿遺跡では、産業の一つの具体例として、高標高地の大型炭窯の存在を示唆していた。そして、湯之口遺跡調査終了後の平成7年6月、標高530メートルの御殿郷遺跡において、平安時代と考えられる大型炭窯の調査が行われ、山間地の開発が指向された要因の一つを立証することとなった。御殿郷遺跡では炭窯1基しか検出されなかつたが、山林内の調査であったため、周辺に集落が存在する可能性は残っている。しかし御殿郷遺跡周辺では、御殿遺跡のような水田可耕域が存在しない。湯之口遺跡も同様に、水田可耕な後背地をもっていない。しかし、尾根の東側の大猿川右岸、現在通称芸術家村のある付近では、ゆるやかな斜面が広がっており畠作程度は可能であったかと思われる。

御殿遺跡の場合、水田経営や、ヤマの開発を指向する産業の可能性、また鏡を製造する専業集団など、山岳信仰を核とする拠点的集落と想定できる要素が充分である。しかし、湯之口遺跡の場合、集落成立の要因としては、ヤマでの産業以外に求められない。

湯之口遺跡調査の当初は、高標高地である故、特殊性を持った集落であると考えていた。それは宇通遺跡や御殿遺跡を核とする衛星集落のもので、標高500メートルを越える地点では、特殊な要因がない限り集落は

形成されない、という意識があったからである。しかし湯之口遺跡は、畠作を背景とする以外は、平野部と変わりない、ごく一般的な小規模集落であったと考えられ、そして、それが山間地集落の本来的な姿であったのではないだろうか。

炭焼き程度の作業ならば、炭焼きの季節のみの居住で十分である。ヤマの開発の前段階に、そのようなヤマにおける産業形態があった筈である。ところが、サトにおける新たな産業の進展によって、ヤマの産業が規定され分業化が促される。やがて、組織的にヤマの産業に従事する専業集団が出現し、彼らの居住地となる集落が営まれる。そしてそれが、宗教的なヤマの開発と結び付いて、宇通遺跡や御殿遺跡のような拠点的集落が形成された。湯之口遺跡は、決して宇通遺跡や御殿遺跡から派生したものではなく、この流れの中の一断面として捕らえられると思う。

今後、赤城南麓地域における調査の進展に伴い、山間地集落の解明に期待がもたれるが、それは山間地で完結するものではなく、平野部での集落の動向と有機的な関連性を持って理解されるべきであろう。

- (1) 坂口一、三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重複と共仰慣習による土器形式相列の検討—」『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会 1986
- (2) 湯之口遺跡の柏川上流は、不動堂(本尊滻沢不動明王像応永13(1406)年鉛造)や不動大流があり、江戸期まで盛んな修験道の場であった。しかし今のところ、平安時代に密教系の信仰があった事を裏付ける証拠はない。

挿 図

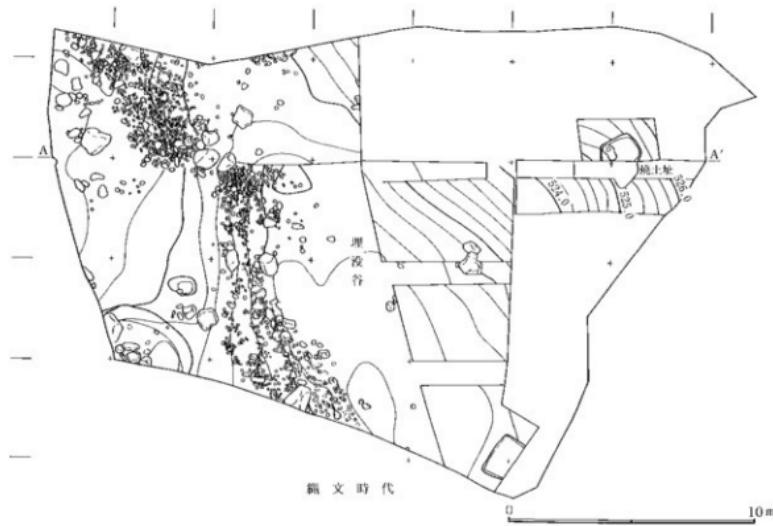
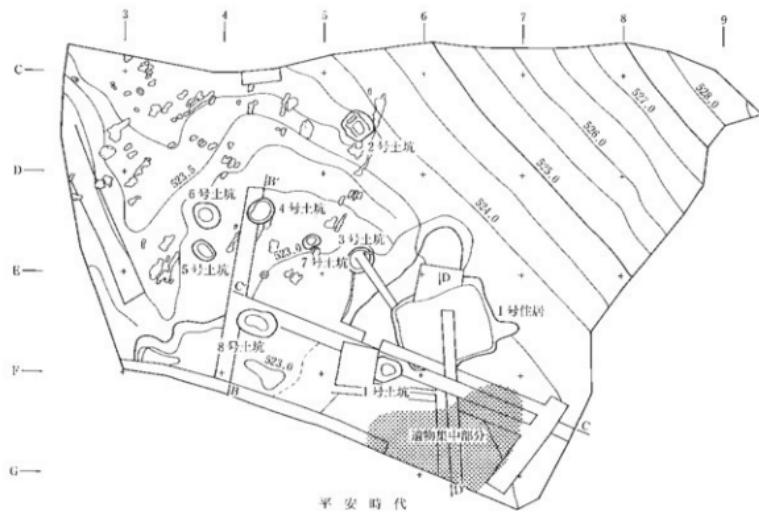


図7 湯之口遺跡全図

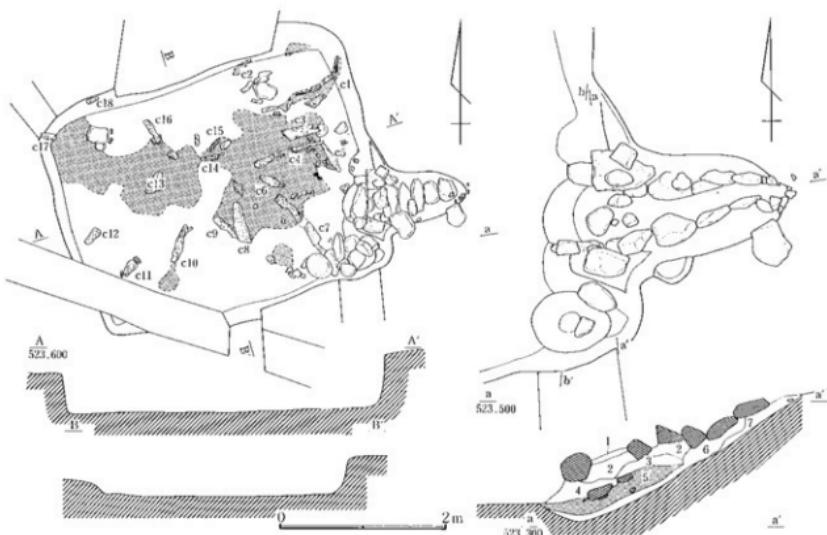
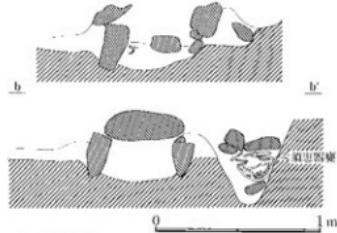


図8 I号住居実測図



カマド土層説明

- 1 黒褐色 粘子細かくサラッとした土。
- 2 暗褐色 砂土粒をごくわずか含む。しまり弱い。
- 3 暗赤褐色 緑土、灰化物を含む。粒子やや粗く、しまり弱い。
- 4 暗赤褐色～暗褐色 少量の炭土粒、灰化物を含む。
- 5 黒褐色 3割より明るい色調。火灰面硬土。
- 6 黒褐色 ごくわずか燒土粒を含む。粘性ややある。
- 7 黒褐色 ごくわずか燒土粒を含む。6割より緻密で色調明るい。

図9 I号住居カマド実測図

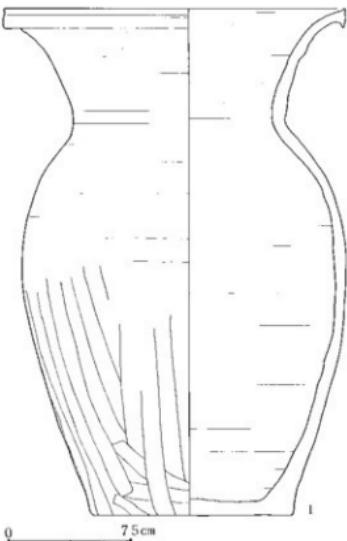


図10 I号住居出土遺物



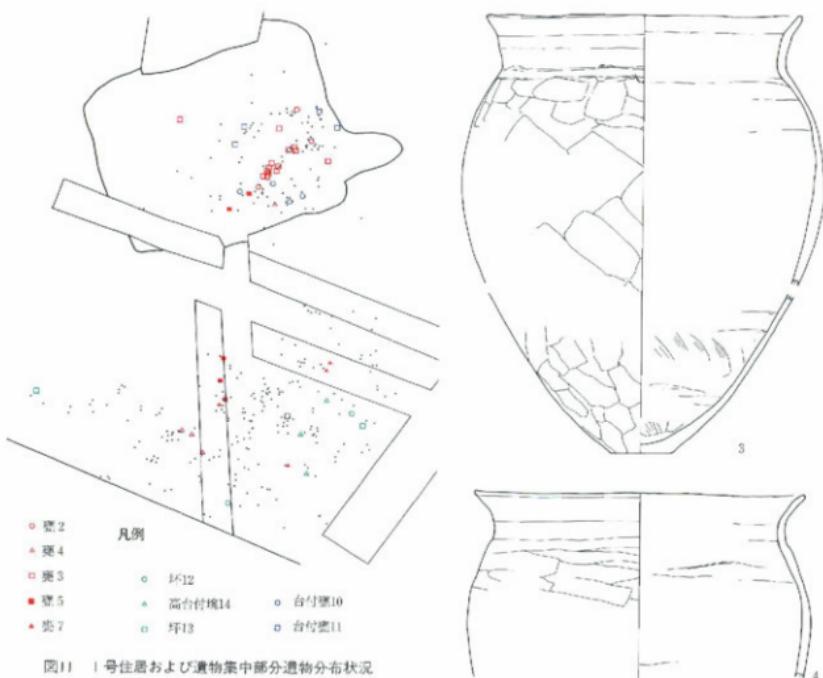


図11 1号住居および遺物集中部分遺物分布状況

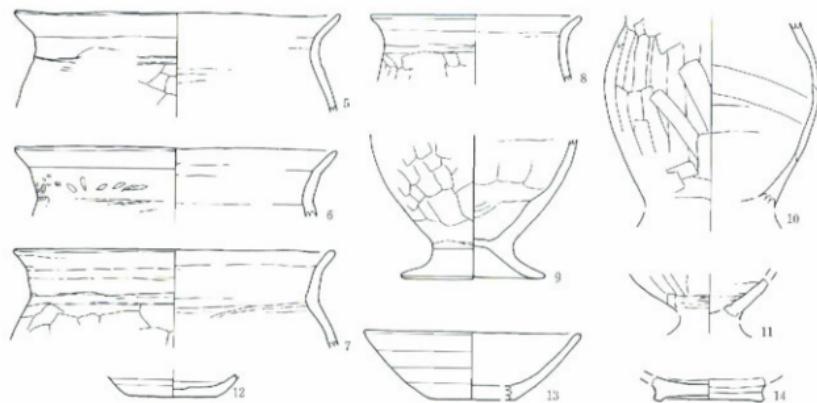


図12 1号住居および造物集中部分出土の遺物

1号住居および1号住居南遺物集中部 出土土器観察表(図9・10、Pl.)

番号	種類 器種	現存状態 計測値(cm)	器形の特徴	外面調査	内面調査	①胎土 ②焼成③色調 ④施考・その他の 記述	出土位置
1	須恵器 壺	口縁部約1/2欠損 40.7・27.5・13.5	肩下部から直線的に立ち上がり肩部はあまり張らない。口縁部は強く外反。	口縁部クロコ成形ナデ。肩下部横位へラケズリの後ナデ。肩下部縱位へラケズリの後ナデ。底部へラケズリ。	口縁部ロクロ成形ナデ。肩部へラケズリおよびナデ。	①細い砂粒を少量含む。②褐色③7.5YR6/1灰	1号住居窓穴
2	土師器 壺	1/4残存 -・(21.0)・-	頸部の字状を呈する。	肩上部から口縁部ヨコナデ。 肩上部横位へラケズリ。	肩上部から口縁部ヨコナデ。 肩下部横位へラケズリ。	①細かな砂粒を少量含む。②良好③7.5YR6/4にぼい黄	1住居下層 ~床面 カマド
3	土師器 壺	肩中部欠損 口縁部 1/3欠損 (26.9)・19.0・3.6	頸部削れたコの字を呈する。肩上部に最大径を持ち短肩気味	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部横位へラケズリ。肩中部から下部斜位へラケズリ。	口縁から肩中部ヨコナデ。肩下部斜位へラケズリの後ナデ。	①細かな砂粒を少量含む。②良好③7.5YR7/6灰	1住居下層 ~床面 カマド
4	土師器 壺	口縁部から肩下部約 1/4残存 -・(29.2)・-	頸部削れたコの字状を呈する。	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部と肩部横位へラケズリ。肩上部横位へ斜位へラケズリ。	口縁部ヨコナデ。肩上部横位と肩部横位へラケズリ。肩上部へラケズリ。	①砂粒を含む。②良好③5YR6/6橙	1住居面 カマド
5	土師器 壺	口縁部から頸部約 1/4残存 -・(19.8)・-	頸部削れたコの字状を呈する。	口縁から頸部ヨコナデ。肩部と肩部横位へラケズリ。肩上部横位へ斜位へラケズリ。	口縁部ヨコナデ。肩上部横位へラケズリ。	①砂粒を少量含む。②普通③5YR5/4にぼい赤褐	1住居下層 遺物集中部
6	土師器 壺	口縁部から頸部約 1/4残存 -・(19.6)・-	頸部外傾するコの字状で口縁、肩部塊の屈曲が明顯。	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部へラケズリ。	口縁から頸部ヨコナデ。	①細かな砂粒を少量含む。②良好③5YR6/6橙	1住カマド 遺物集中部
7	土師器 壺	口縁から肩上部 1/2弱残存 -・(19.4)・-	頸部やや不明瞭なコの字を呈する。	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部横位へラケズリ。	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部へラケズリ。	①砂粒をやや多く含む。②普通③7.5YR7/6橙	遺物集中部
8	土師器 壺	口縁から肩上部約 1/2弱残存 -・(12.8)・-	口縁部ゆるやかに外反する。頸部と肩部の境は直線的で肩張りの少ない小型壺。	口縁から頸部ヨコナデ。肩部横位へラケズリ。	口縁から頸部ヨコナデ。肩上部へラケズリ。	①砂粒を含む。やや粗い胎土。②普通③5YR6/6橙	1住カマド 遺物集中部
9	土師器 壺	脚部および肩下部約 1/5残存 -・-・-・8.8	脚部は大きく開く。	肩下部横位のへラケズリ。脚部ヨコナデ。	肩下部へラケズリ。脚部ヨコナデ。	①粗い砂粒を含む。②普通③5YR6/6橙	1住カマド 窓穴
10	土師器 壺	肩部約1/5残存 台付壺 -・-・-	小型の台付壺。	肩部横位のへラケズリ。	肩部横位のナデ。	①砂粒を多く含む。②普通③5YR6/6橙	1住 貨下層 ~床面
11	土師器 壺	肩下部のみ残存 台付壺 -・-・-	小型の台付壺。	肩下部横位へラケズリ。	ナデ。	①細かな砂粒を少量含む。②普通③10YR7/4にぼい黄橙	1住カマド 遺物集中部
12	須恵器 壺	底座から体部下半約 1/2残存 -・-・-・5.2		ロクロ成形。底部回転糸切り。	ロクロ成形。	①わざりに砂粒を含む。②普通③5YR6/6橙	1住壁裏覆土 中層
13	須恵器 壺	体部約1/4残存 4.2・(13.2)・5.2	やや深めの体部。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	ロクロ成形。	①砂粒を含む。②褐色③10YR6/3にぼい黄橙	中層部分 遺物集中部
14	土師器 高台付 壺	底部のみ残存 -・-・-・6.8	瓶面台形の低い高台が付く。	底部ナデ。	底部ナデ。	①砂粒を少量含む。②普通③5YR6/6橙	遺物集中部

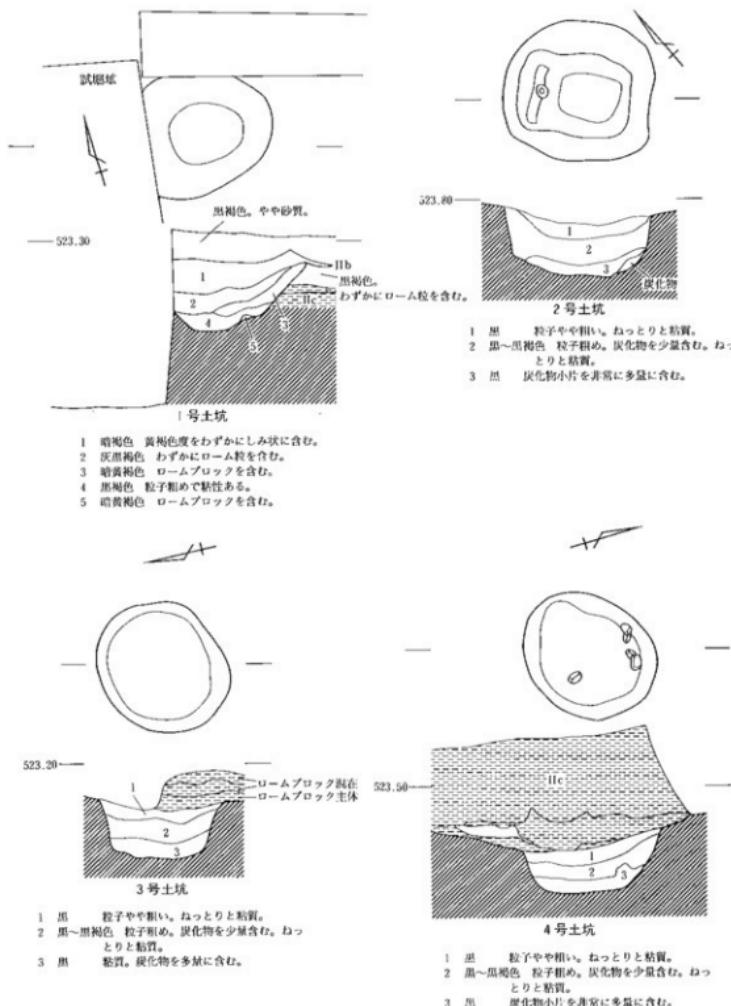


図13 平安時代土坑実測図

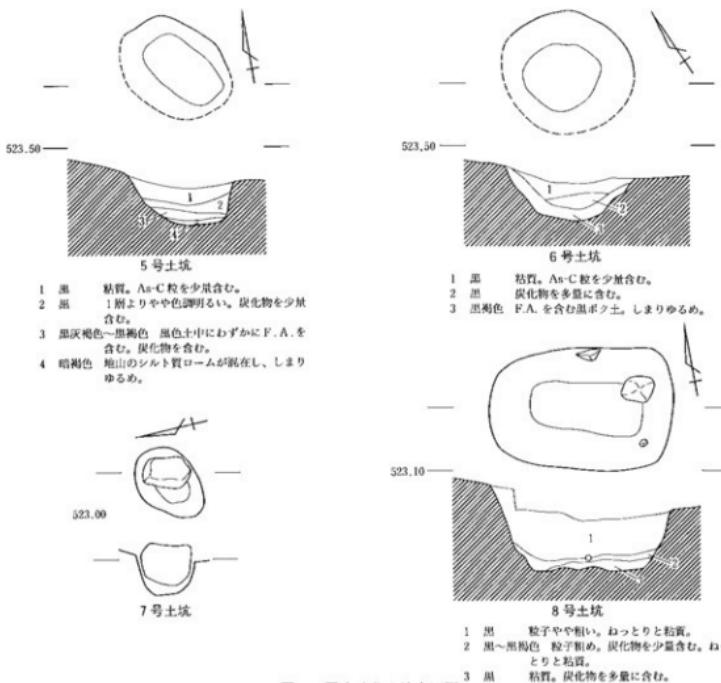


図14 平安時代土坑実測図

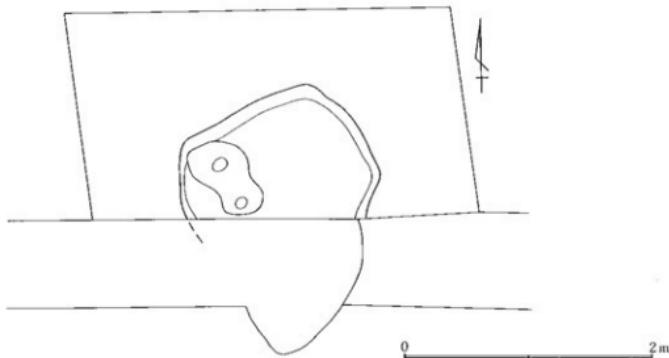


図15 縄文時代跡土坑実測図

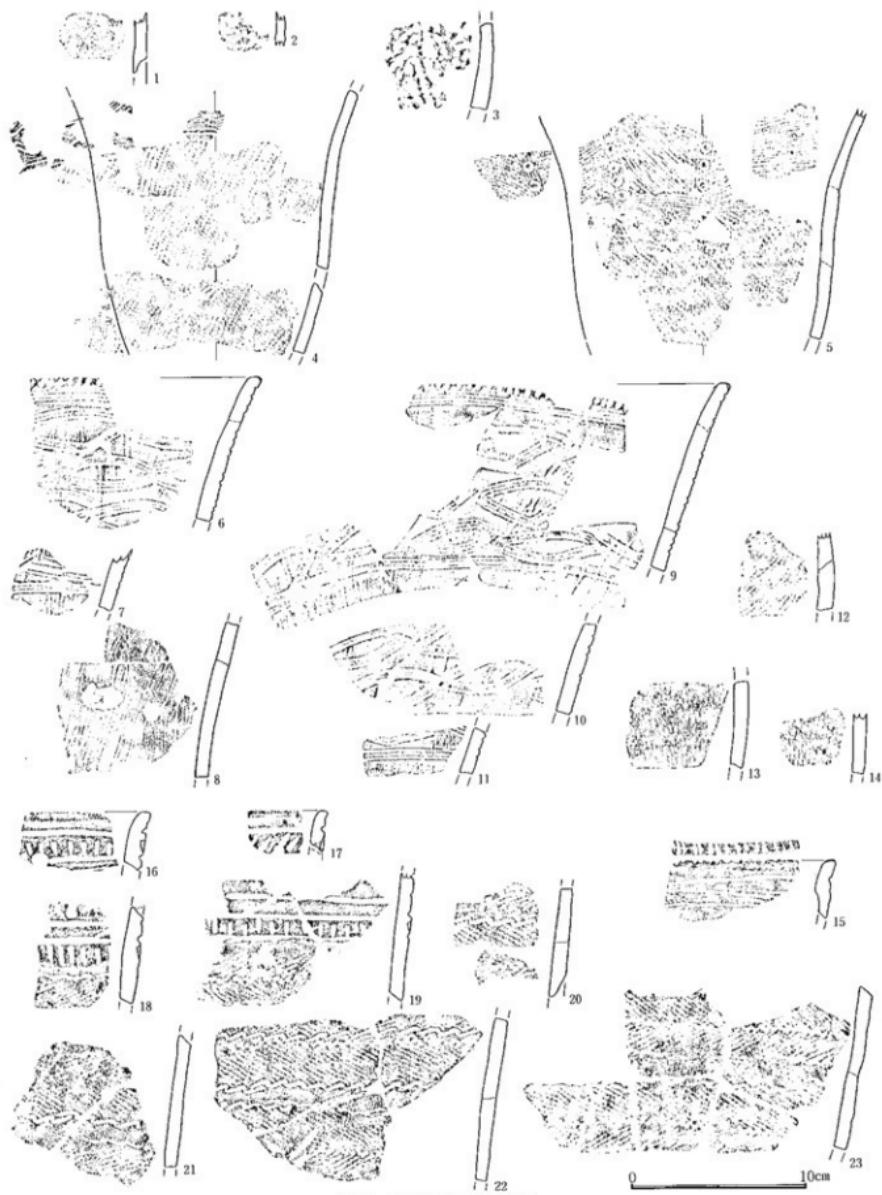


図16 包含層出土の縄文土器

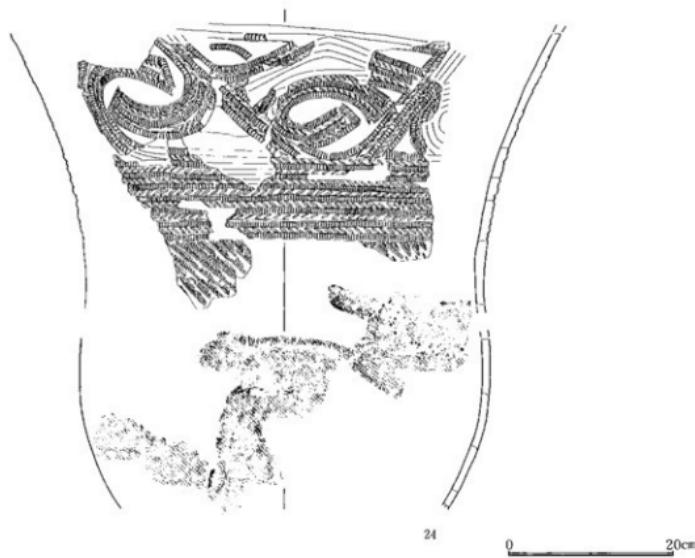


図17 包含層出土の縄文土器

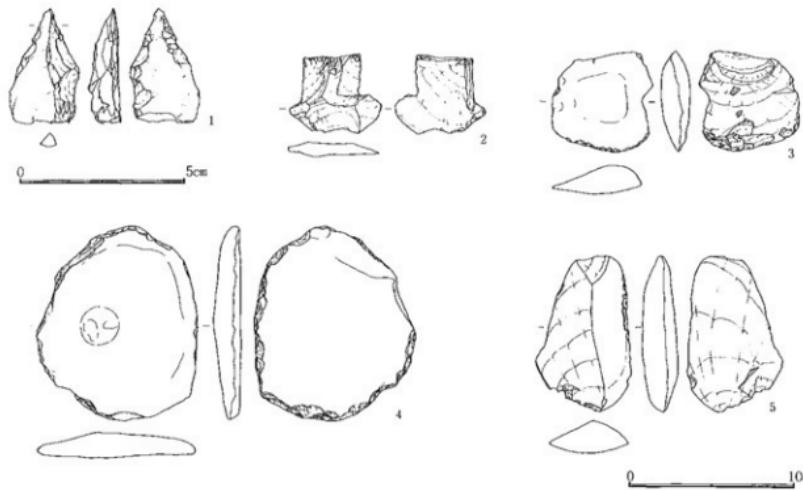


図18 包含層出土の石器

包含層出土石器観察表(図17、PL.)

番号	器種	計測値(cm)	重量(g)	石 質	出土位置	特徴・その他
1	ドリル	長さ3.4 幅1.9 厚さ0.9	4.7	頁 岩	F-5	先端部は複な調整で作り出す
2	剥 片	長さ4.8 幅5.9 厚さ0.7	21.2	黒色安山岩	E-5	上端に原石面、下端と右側縁にわずかに使用痕が認められる。
3	剥 片	長さ4.9 幅5.6 厚さ1.7	65.1	頁 岩	E-4	原石を打ち欠いただけの剥片を使用。下端に使用痕があり、スクレーパーとして利用したものか。
4	剥 片	長さ11.6 幅9.5 厚さ1.7	214.8	ホルシフュルス	D-3	原石を打ち欠いただけの剥片の縁辺に簡単な調整を施す。
5	剥 片	長さ9.3 幅5.6 厚さ2.1	93.2	黒色安山岩	E-5	表面に原石面を残す。下端および右側縁に使用痕が認められる。

写 真 図 版



1 調査区全景



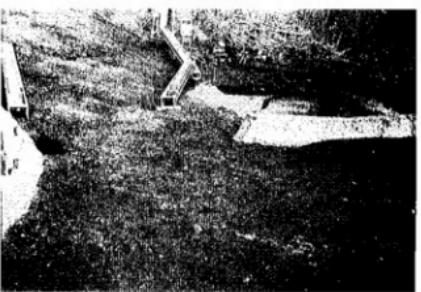
2 山崩れ堆積物土層断面



3 黒ボク土層断面



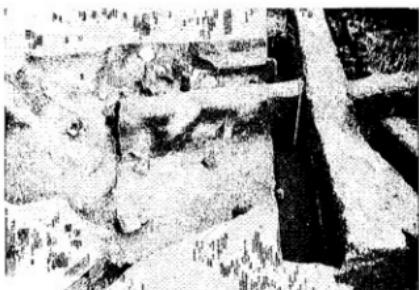
4 山崩れ堆積物下位の倒木痕



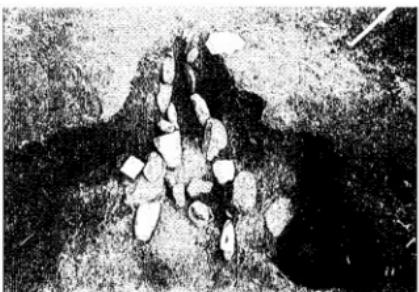
5 山崩れ堆積物下位の倒木痕



1 1号住居全景



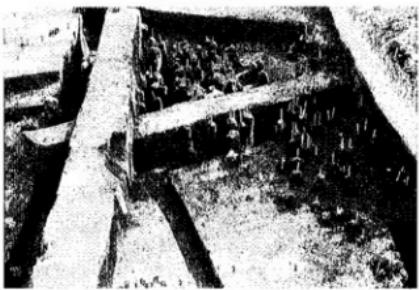
2 1号住居遺物出土状態



3 1号住居カマド



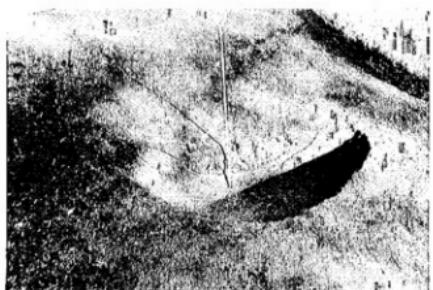
4 1号住居炭化物出土状態



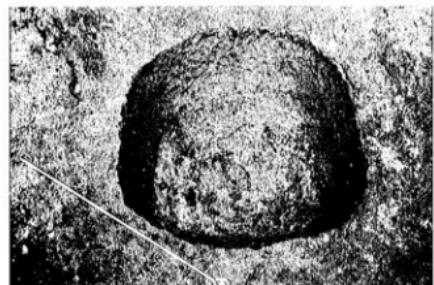
5 1号住居南側遺物集中部分



1 1号土坑



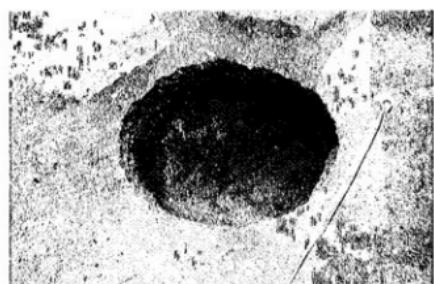
5 5号土坑セクション



2 2号土坑



6 6号土坑セクション



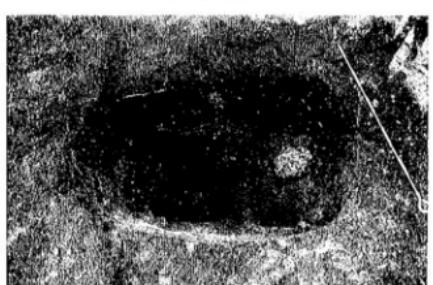
3 3号土坑



7 7号土坑



4 4号土坑



8 8号土坑



1 縄文時代焼土址



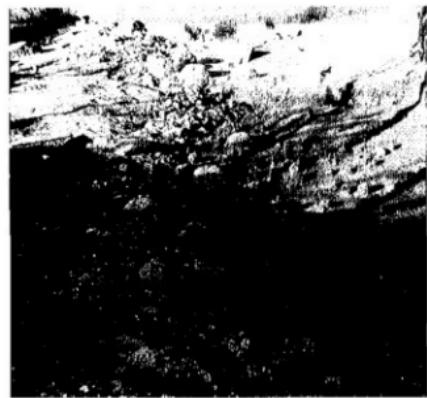
2 縄文時代焼土址セクション



3 縄文埋没谷礫層（東から）



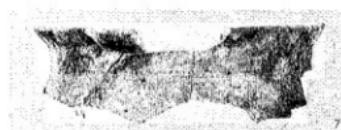
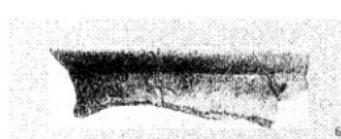
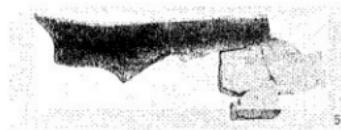
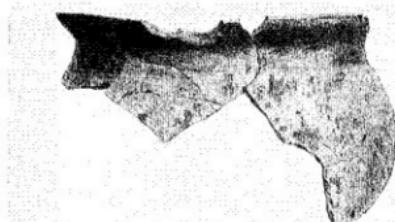
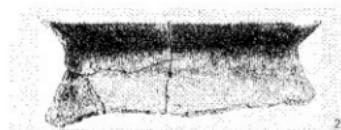
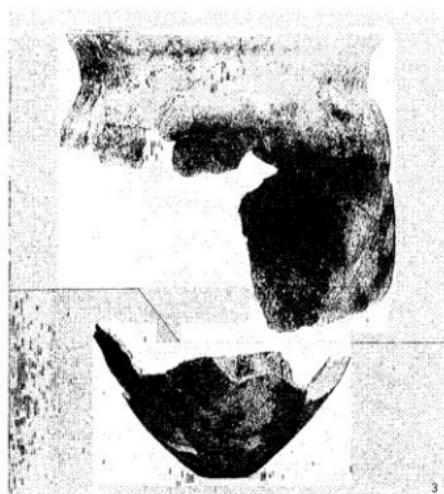
4 縄文埋没谷礫層（北から）



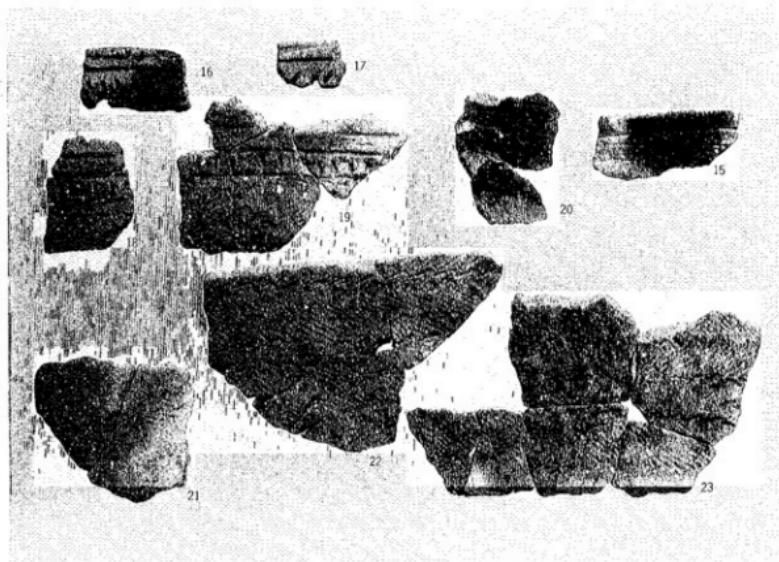
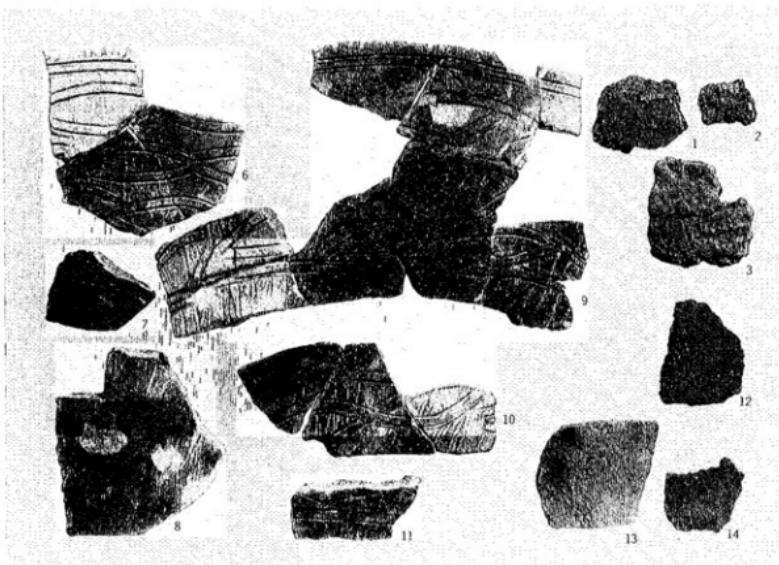
5 縄文埋没谷礫層（南から）



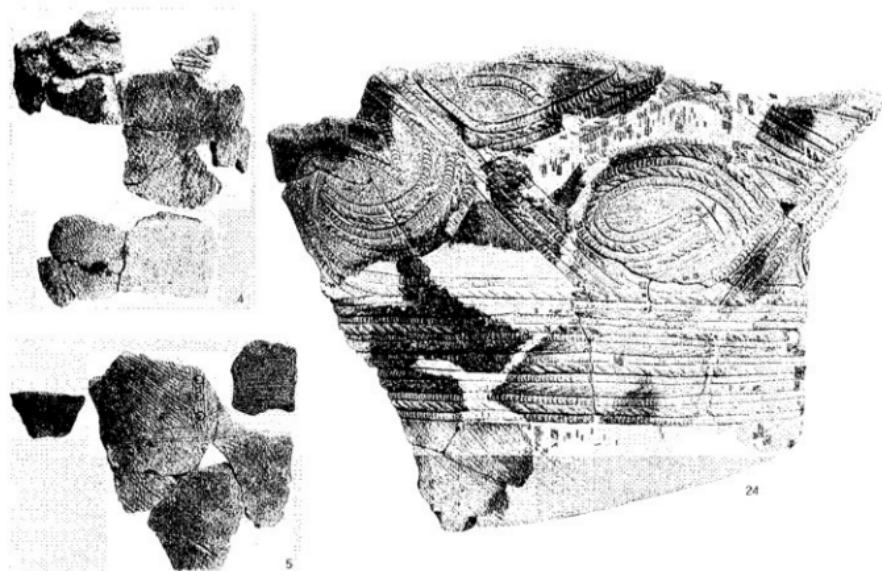
6 調査風景



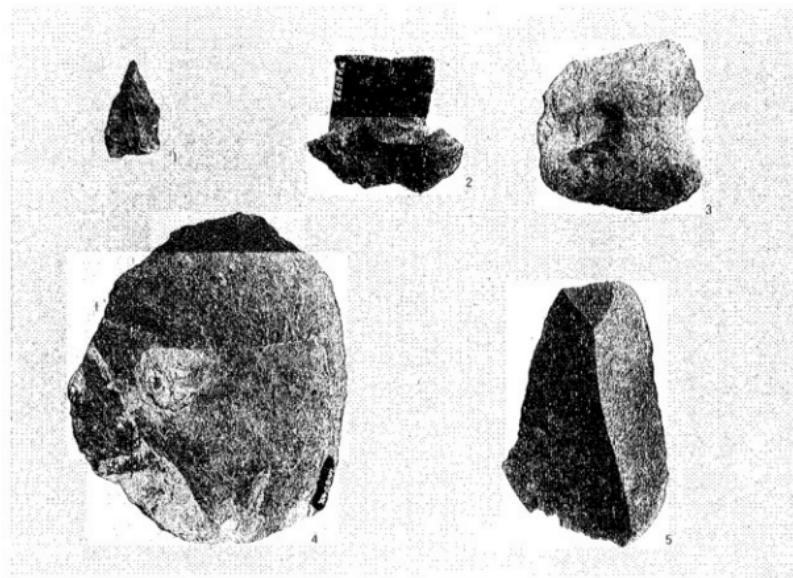
I号住居および遺物集中部分出土の土器



包含層出土の縄文土器



包含層出土の縄文土器



包含層出土の石器

発掘報告書抄録

フリガナ	ユノクチイセキ
書名	湯之口遺跡
副書名	平成6年度県営広域営農圃地農道整備事業赤城南麓2期地区に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	柏川村文化財報告
シリーズ番号	第16集
編著者名	梅澤克典
編集機関	群馬県勢多郡柏川村教育委員会
編集機関所在地	371-02 群馬県勢多郡柏川村大字西田面194-4
発行年月日	1996年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
湯之口遺跡	勢多郡柏川 村大字中之 沢字湯之口	103063		36°27'35"	139°11'55"	1994年 10月30日 ～ 1995年 1月20日	355m ²	農道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湯之口遺跡	集落	縄文 平安時代	焼土址 1基 包含層 竪穴住居 1軒 遺物集中部分 1基 土坑 8基	早、前期 土師器、須恵器	

附 篇

柏川村、平成6年度広域農道建設に伴う湯之口遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

赤城山南面の湯之口遺跡の発掘調査では、住居址のほか3層準におもに火山灰土からなる地すべり堆積物が認められた。そこで地質調査を行い土層の層序についての記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って地すべりの発生年代と遺構の構築年代についての資料を収集することになった。地質調査の対象とした地点は、調査区北面と1号住居址南北ベルトの2地点である。

2. 地質層序

(1) 調査区北面

この地点では、3層準に火山灰土から構成される地すべり堆積物が認められた。ここでは3層準の地すべり堆積物を、仮に下位より第1～3地すべり堆積物と呼ぶことにする。第1地すべり堆積物と第3地すべり堆積物とそれらの間の土壤が認められたAセクションを柱状図にして図1に示す。ここでは、下位より暗褐色土(層厚29cm以上)、黄色軽石に富む暗褐色土(層厚10cm)、軽石の最大径8mm)、白色軽石混じり黒褐色土(層厚7cm)、軽石の最大径43mm)、黒褐色土(層厚6cm)、第1地すべり堆積物、暗褐色土(層厚4cm)、黒褐色土(層厚29cm)、第3地すべり堆積物、暗灰色土(層厚18cm)の連続が認められた。

これらの土層のうち、暗褐色土に含まれる黄色軽石は、スポンジ状に比較的よく発泡した軽石で、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来するものと考えられる。またその上位の粗粒の白色軽石はあまり発泡しておらず、その特徴から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989)に由来すると考えられる。

第1地すべり堆積物は、下位より灰褐色土(層厚1cm)、黄色軽石に富む褐色土(層厚4cm)、褐色土のブロック層(層厚31cm)から構成されている。黄色軽石は、層相から約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石(As-Sr, 中沢ほか, 1984, 早田, 1994)に由来するものと考えられる。一方第3地すべり堆積物は、下部の葉理の発達した褐色土(層厚65cm)と上部の褐色砂質土(層厚62cm)から構成されている。

Bセクションの土層柱状図を図2に示す。ここでは、下位より黒色土(層厚3cm以上)、第1地すべり堆積物、褐色土(層厚25cm)、暗褐色土(層厚30cm)、第2地すべり堆積物、第3地すべり堆積物、暗褐色土(層厚17cm)の連続が認められる。これらの土層のうち、第1地すべり堆積物は、下位より灰褐色土(層厚0.8cm)、黄色細粒軽石層(層厚8cm)、軽石の最大径3mm)、褐色土(層厚127cm)から構成されている。第2地すべり堆積物は褐色土(層厚27cm)からなる。また第3地すべり堆積物は、下部の葉理の発達した灰褐色砂層(層厚31cm)と、上部の砂質褐色土(層厚16cm)から構成されている。第1地すべり堆積物のうち、下部の黄色軽石層は、層相からAs-Srに同定される。

(2) 1号住居址南北ベルト

ここでは、床面の上位に下位より黒褐色土(層厚5cm)、黄色軽石に富む暗褐色土(層厚7cm)、黄色軽石混じり黒色土(層厚7cm)、灰褐色粗粒火山灰層(層厚4cm)、黒色土(層厚12cm)が堆積している。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

Aセクションにおける第1地すべり堆積物と第3地すべり堆積物の間の土壤、およびBセクションにおける第1地すべり堆積物と第2地すべり堆積物の間の土壤について、基本的に5cmごとに採取された試料のうちの5cmおきの試料10点、さらに1号住居址南北ベルトの灰褐色粗粒火山灰層の合計11点について、テフラ検出分析を行うことになった。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。Aセクションの試料番号1、3、5、7のいずれの試料にも、比較的よく発泡した淡褐色の軽石が比較的多く含まれている。軽石の最大径は3.0mmである。軽石の班晶には斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に由来するものと考えられる。一方Bセクションの試料番号1、3、5、7、9、11のいずれの試料にも、軽石が少量認められた。軽石には白色で発泡のあまりよくないもの(最大径2.1mm)と、灰白色で比較的よく発泡したもの(最大径1.3mm)の2種類が認められた。前者はその特徴からHr-FAまたはHr-FPに、そして後者はAs-Cに各々由来するものと考えられる。また1号住居址南北セクション試料番号1には、比較的よく発泡した淡褐色の軽石が多く含まれている。軽石の最大径は2.9mmである。軽石の班晶には斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からAs-Bに由来するものと考えられる。

4. 考察—地すべりの発生年代と遺構の構築年代について

土崩観察の結果、第1地すべり堆積物は、少なくともHr-FAの上位にあることが明らかになった。また第1地すべり堆積物と第2地すべり堆積物の間にはAs-CとHr-FA起源の軽石しか認められなかったものの、第1地すべり堆積物と第3地すべり堆積物の間にはAs-B起源の軽石が認められた。このことから第2地すべり堆積物と第3地すべり堆積物間に、As-Bの降灰層があることがわかる。その層位から第1地すべり堆積物および第2地すべり堆積物については、818(弘仁9)年に北関東で発生した地震に伴う崩壊や地すべり(能登ほか, 1990)に由来している可能性が考えられる。また1号住居址の覆土中にAs-Bが認められたことから、その構築年代はAs-B降灰以前であることが明かである。

5. ま と め

湯ノ口遺跡において地質調査およびテフラ検出分析を合わせて行った。その結果、3層の地すべり堆積物が検出された。これらのうち最下位の第1地すべり堆積物およびその上位の第2地すべり堆積物の層位は、6世紀初頭の榛名二ツ岳浜川テフラ(Hr-FA)の上位で、1108(天仁元)年の浅間Bテフラ(As-B)の下位にあることが明らかになった。これらの堆積物については、それらの層位から818(弘仁9)地震に関連したもの的可能性が指摘できる。また第3地すべり堆積物は、As-Bより上位にある。さらに1号住居址の構築は、As-B降灰以前であることも明ら

かになった。

文 献

- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, No.157, p. 41-52.
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山、黒駒～前掛削のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, No.14, p. 69-70.
能登 錠・内山泰志・早田 勉 (1990) 赤城山南麓の歴史地質。信濃, 42, p. 755-772.
坂口 一 (1986) 横名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥背柳遺跡」, p. 103-119.
早川 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p. 297-312.

表1 湯ノ口遺跡のテフラ検出分析結果

地 点	試 料	軽 石 の 量	軽石の色調	軽石の最大径
Aセクション	1	++	淡褐	2.3
	3	++	淡褐	3.0
	5	++	淡褐, 白	2.2, 1.6
	7	++	淡褐	2.2
Bセクション	1	+	白, 灰白	1.3, 1.2
	3	+	白, 灰白	2.1, 1.2
	5	+	白, 灰白	1.9, 1.2
	7	+	白, 灰白	1.7, 1.3
	9	+	白, 灰白	1.9, 1.3
	11	+	白, 灰白	2.1, 1.1
1号住居址	1	+++	淡褐	2.9

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, + :

少ない, - : 認められない。最大径の単位は, mm。

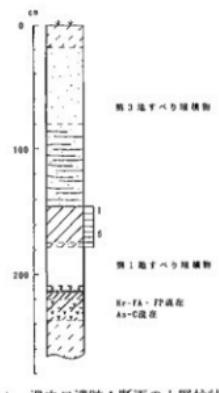


図1 湯之口遺跡A断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

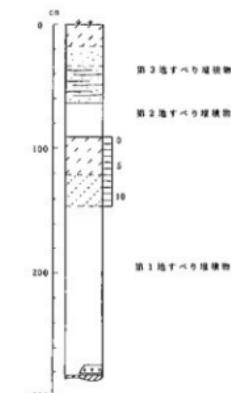


図2 湯之口遺跡B断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

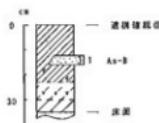


図3 湯之口遺跡1号住居址南北ベルトの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



湯之口遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

焼失住居から出土する構築材については、これまでにも各地で樹種同定が行われてきた。それらの結果から、住居構築材の用材選択は遺跡周辺の植生が密接に関係すると指摘されている（高橋・植木、1994）。群馬県では、渋川市石原東遺跡及び半田中原・南原遺跡、北橘村芝山遺跡、富岡市田篠上平遺跡、安中市下塚田遺跡等で平安時代の構築材に使用された木材の種類が明らかにされている（高橋、1988；パリノ・サーヴェイ株式会社、1990, 1993；橋本ほか、1994）。これらの樹種構成は遺跡によって多少異なっており、遺跡をとりまいた植生などの違いを反映している可能性がある。また榛名山東麓地域の調査では、遺跡によって樹種構成に違いがあることから、生業等も用材選択に反映することが推定されている（橋本ほか、1994）。

赤城山南麓地域では、柏川村長岡遺跡で、奈良時代の焼失住居から出土した構築材1点がクヌギ節に同定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994）。しかし、その他に住居構築材の樹種を明らかにした例はなく、その用材選択については不明である。本報告では、平安時代の焼失住居から出土した構築材の樹種を明らかにし、当該期の用材選択について考察する。

1. 試 料

試料は、9世紀後半の1号住居址床面から出土した、住居構築材と考えられる炭化材18点（C-1～18）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方 法

木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結 果

18点の試料は、全て落葉広葉樹で4種類（クマシデ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・イヌエンジュ）が同定された（表1）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・クマシデ属 (*Carpinus* sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4（時に10以上）個が複合する。横断面では梢円形、管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

以上の特徴から、クマシデ属の中でもイワシデ(*Carpinus turzanicovii* Hance)、イヌシデ(*C. tschonoskii* Maxim.)、アカシデ(*C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume)のいずれかである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinns* sp.)

ブナ科

環孔材で孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔團部は1~4列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・イヌエンジュ (*Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (maxim) Kitamura)

マメ科イヌエンジュ属

環孔材で、孔團部は1~4列、孔團外でやや管径を減じた後、多数の道管が集まって接線方向・斜方向に複合し、木口面で帶状の模様をつくる。道管は單穿孔を有している。小道管は階層状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性山型~同性、1~8細胞幅、1~80細胞高。

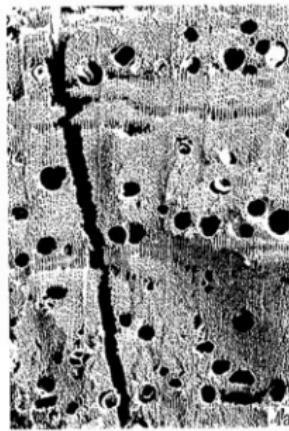
4. 考 察

構築材にはコナラ節とクリが多く、他にクマシデ属とイヌエンジュが認められた。群馬県でこれまでに明らかにされた平安時代の構築材の樹種構成を見ると、遺跡によって多少異なる。

赤城山麓における平安時代の構築材については、北橘村芝山遺跡で調査されており、クリを中心とした用材選択が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社、1993)。また、平安時代以外では、芝山遺跡で縄文時代および奈良時代中期・後期、北橘村分郷八崎遺跡で縄文時代、赤城村勝保沢中ノ山遺跡で古墳時代、昭和村中棚遺跡で弥生時代末期、糸井宮前遺跡で古墳時代、柏川村長岡遺跡で奈良時代の構築材についてそれぞれ樹種同定が行われている(パリノ・サーヴェイ株式会社、1985, 1986, 1993, 1994; 三野、1985; 鈴木・能城、1988)。これらの調査では、北橘村に位置する2遺跡(芝山遺跡・分郷八崎遺跡)ではクリを中心とする樹種構成が確認できるが、他の遺跡ではクリは少ない。また、勝保沢中ノ山遺跡では、コナラ節を中心としながらも比較的種類数が豊富である。このような遺跡の位置や時代による種類構成の違いは、高橋・植木(1994)の指摘する古植生の違い等を反映している可能性がある。

また渋川市石原東遺跡では、平安時代の住居構築材にクヌギ節を中心とする種類構成が確認されている。一方、渋川市半田中原・南原遺跡では平安時代の構築材に多くの種類が利用され、種類構成が豊富で中には栽培種のモモも確認されている(植木ほか、1994)。これらの結果について、石原東遺跡では製鉄遺跡に近いために燃料確保のための薪炭林があり、そこから住居構築材も得ていた可能性が指摘されている。半田中原・南原遺跡では、周間に生育していた樹木や栽培種を構築材に利用したことが推定されている。北橘村柴山遺跡では、奈良時代の構築材に栽培種のモモが確認されており、渋川市における調査結果と同様の可能性が指摘できる。

赤城山南麓では、平安時代の製鉄炉や製鉄燃料材を製炭したと考えられる炭窯が数多く知られている。これらの製鉄遺跡では、大胡町乙西尾引遺跡における樹種同定結果(高橋・鶴原、1994)から、クヌギ節を中心として利用していたと考えられる。製鉄が膨大な量の木炭を必要とすること、本遺跡の近くに炭窯が検出された遺跡が所在すること、時代はやや古くなるが村内長岡遺跡でもクヌギ節が多数確認されていることなどを考慮すれば、本遺跡の周囲にも薪炭林が見られた可能性がある。しかし、今回の結果ではクヌギ節は1点も確認されていない。この背景に周囲にも薪炭林が見られた可能性がある。しかし、今回の結果ではクヌギ節は1点も確認されていない。この問題を解決するためには、周辺でさらに多くの資料を蓄積したい。



4. イヌエンジュ (試料番号C-16)

a: 木目, b: 横目, c: 板目

200μm: a
200μm: b, c

柏川村文化財報告第16集 湯之口遺跡

平成8年3月3日印刷
平成8年3月20日発行

編集 発行 柏川村教育委員会
群馬県勢多郡柏川村西田面194-4
〒371-02 Tel 0272-85-3311
印刷 朝日印刷工業株式会社
